

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第三号（通巻第一四七号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第147号

7. 2006

遠眼鏡

品川 鈴子

陸橋で手に触るなんぢやもんぢやの香

身じろがぬ青葉木菟ずれ遠眼鏡

命日の夫先づ入りし菖蒲風呂

実梅拾ふ奇数偶数げんかつぎ



淡路夏霞み嘉兵衛の遠眼鏡

浜木綿の島に末期は「万歳」^{ウライ}とて

ロシア語

渦潮は天の瓊^{ぬほこ}矛^こで攪きしまま

浦島の磯に散らばり潮干狩

山門に束なす涼風潮の香

句友K様へ

うぶすなの六^む甲^この蝸君を待つ



玉 鈴

北海道 森 早和世

永き日や三段重に詰め込んで
ふるさとを訪ふや喪明けの黄水仙
梅 真白 般若 心経 三巻目
紅梅のうしろに点呼はじまれり

大阪 師岡洋子

父の書にたばこの匂ひ啄木忌
釣人に釣見る人に花吹雪
花冷えの膳に向き合ふ膝がしら
初雲雀父の使ひし椅千に聴く
蛸烏賊目玉並べて売られをり

兵庫 八木柊一郎

春夕焼男ひとりしが干物焼く
不仕合せたりし妻かも葱の花
行き逢ふは美女とかぎらず夕桜
花冷えや生命線のほそきこと
春蘭くる小舟の腹を打つ波も

吟

東京 安田とし子

祖師像はいづこ見給ふ花の雲
満開の花の暗みに瞑想す
躑躅にははやく館や湖まさを
関所跡へつゞく道とや杉の花
史碑仰ぐ肩に落花の二・三片

愛媛 梁瀬照恵

打傷の染み消え難き菜種梅雨
音頭取りが先づ酔ひ潰れ花の宴
三弦の手元くるはす花吹風
花のなか檀家総出の晋山式

兵庫 山口庸子

飾り馬巫女を従へ摩耶詣
摩耶参り山伏四方へ矢を放つ
参道の百階を埋め花馬酔木
分秒の診察を待つ目借り時
三楹の花のほとりでお手玉す

神奈川 山崎辰見

蓬餅今年も同じ母の文
春雨に傘さしかけしだけのこと
北国は花のさかりと旅戻り
城中も城下の町も雛飾る
囀のベンチに愛を確むる

香川 合川月林子

春愁の象小さき眼で吾を視る
抱き人形の視線は遠し春愁
囀りのまつただ中にゐて独り
表札のなき家なれど燕来る
松の芯火を吹く窯を黙し見る

大阪 赤木真理

おむすびの塩を多めに夏浅し
ゼツケンの文字くつきりと夏始め
夏立ちて麻のクロスに糊きかせ
麦の秋柳のかごの飴色に
ねじ巻きの時計で目覚めパリー祭

兵庫 秋田直己

春の風天女の民話残る村
夜櫻に茶屋より三味の音流る
単線の電車待つ間を春の風
春一番飛ばさる帽子フランス製
英語にて自己紹介する花の下

愛媛 足利罇子

線香の匂ひに坐して春座敷
政局を聞きつつ厨で鰯を煮る
洒落心失せし媼の春炬燵
雪解川海に入りても濁りをり
春の海投げし小石の二段飛び

愛媛 足利徹

春落葉妻には重き竹箒
經典車まわし合掌風光る
土器の思はぬ飛距離春の丘
ちらばりて釣舟光る春の海

薬草歳時記

(二四六) 曼陀羅華 (ダチュラ)

牛尾曜子

人酔わす花とも見えず 曼陀羅華

琴女

夏の夕方から、真っ白い筒形の花を次々に咲かせ、花が終わると、とげの生えた実がなり、中に種がたくさん入っています。

ヨウシユチヨウセンアサガオは、西洋から入った朝鮮朝顔の意味で、Datura はアラビア語のタトラ、又はヒンドスタンの上語 Datura からくると言われている。

インド原産ながら今では帰化し、空地、荒れ地に野性化しているナス科の一年草。

薬用部分は種子及び葉。種子にはスコポラミン、アトロピンといったアルカロイドを含む。

ヨウシユチヨウセンアサガオでは葉。

曼陀羅華といい喘息煙草をつくるが、有害なので要注意。アトロピンには、中枢神経系と自律神経系への両作用があり、自律神経系への作用として

- ① 瞳孔の散大（臨牀的に眼底検査に利用）
- ② 気管支管支筋を弛緩させる（喘息に利用）
- ③ 消化管の痙攣性収縮を抑制（胆石疝痛などの痛み止め）に利用

等があるが、家庭での利用は勧められない。

江戸末期、有名な紀州の医師、華岡青洲は曼陀羅華とトリカブトから、「麻沸湯」と称する麻酔剤を作り、世界で初めて全身麻酔による乳癌の手術に成功した。その折の手術台は、平らに磨き上げられた大きな石で現存している。

この手術台を見ていると、流されたであろう血のことがや青洲の嫁と、姑の確執のことも、生々しく思い起こされるが、曼陀羅華が仏教語であることが、何とはなしに安堵を与えてくれます。

参考文献 花ごよみ花だより

世界百科事典

薬草図鑑

植物 I

身近な薬草

著者略歴 神戸薬科大学卒

八坂書房

平凡社

家の光協会

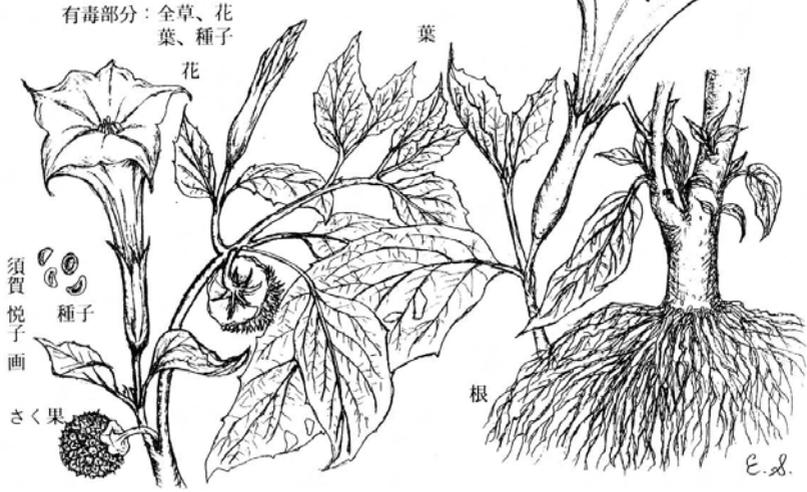
保育社

婦人生活社

チョウセンアサガオ (マンダラゲ、キチガイナスビ) 朝鮮朝顔、曼茶羅華、ダチュラ

[チョウセンアサガオ属] (なす科)

Datura metel L. (= *D. alba* Nees)



気違ひ茄子の夕闇白し廃僧院

平井 照敏

鑑真の辿りし磯路曼陀羅華

田中まさじ

花ダチュラ妻の言葉に毒すこし

橋本 榮治

うつむいて死者の声聴く曼陀羅華

浦 迪子

花ダチュラそむきし人の耳のうら

小倉 斑女

港町ダチュラに荒き夕の雨

柴田美枝子

立ち話棘やはらかきダチュラの実

市橋 章子

曼陀羅華洪茶一碗布衣ふいの句座

勝野 薫

修道院の門は閉ざされ曼陀羅華

塩出 眞一

曼陀羅華窓辺に妻の耳聴し

中島 節子

ぐろっけ

鈴の奏

品川鈴子選

春愁の財布に貯まる診察券
兵庫 中村 碧泉

途中まで相傘頼む花の雨

古顔に石買はされて苗木市

流鏑馬の一矢をはずす花曇

梅香る今に教育勅語の碑
兵庫 内山 芳子

辛夷咲く仏師の庭の大水瓶

一列に地割れを起こす菊菜の芽

たんぼぼや子等は防犯ブザー下げ

御手洗の五十鈴川にも花筏
大阪 藤澤希宗子

赤福屋つばめが頭上をもてなせり

花アロエ魔女には似合ふ簪か

アマリリス陽気に十字架を背負う

身の程にさらりと生きて更衣
伊丹 高橋 照葉

行く春の雲が麒麟の首あたり

余花残花檻のけものは薄目して

春泥の片足乾くフラミンゴ

うばめ慳忽と春潮見え始む
兵庫 国永 靖子

廃屋の明りとなれや樺の花

こごみ採る両手に春の土匂ふ

花よりも高みにありて蔵王堂

花筏 駅舎の下をくぐり抜け
兵庫 大西 和子

五月雨獅子が守りする募金箱

すみれ草グリム童話の小人たち

窓若葉トレニングのペダル踏む

囀りに里程も知らず山歩き
兵庫 高橋 大三

樽尾山の標見つけて風光る

撮らるると枝垂桜に添ふ娘

花びらは羽搏きながら川へ散る
兵庫 水上 貞子

沈丁の香りかきたて家壊す

夜桜に夫と腕組み歩きたる

句座帰り見知らぬ人と花仰ぐ

雪柳天差し地差し風に舞ふ

鉢植糸の割れてをるなり猫の恋
兵庫 藤井久仁子

春眠や彼の世の母に起こさるる

年重ね入らぬ指環春愁ひ

切り株を台とし売らる蓬餅

春埃晒につもりし布袋像

春光に厨子の佛の目覚めたる

嘯りてメリケン波止場活気づく

裸婦像の足にまつはる地虫出で

熟女らにゴンドラゆらゆら春の風

春塵やバチカン広場人あふれ

コロッセオに二十一世紀の春光

楠若葉薄日とらえてこがねいろ

花疲れ嫗ばかりの昇降機

線香の火種大揺れ東風強し

姫辛夷咲けば木の名を尋ねられ

山躑躅「カキーン」と飛ばすシテヲ組

夢二絵を見し目にまぶし若緑

風光る段なす川の競り落ちて

頬染めて自己紹介の花筵

黄沙濃き六甲見やり窓閉ざす

春寒し荷づくりの箱積みあげる

喜寿の春住み慣れし家去りにけり

新しき設備とまどう花の冷え

兵庫

森山八重子

兵庫

廣中 浩子

兵庫

野澤 光代

兵庫

唐鎌光太郎

兵庫

四葉 允子

花の下泣きべそかきつ親を追う

玄関に見慣れぬ豆靴春休

梅林に入りて出口を見失ふ

料峭や悲運のエース名を残し

戸を繰りて言葉も出でず霞濃し

足摺の岬に立ちて南風浴びる

野人めく鯉を浜であぶり焼

春北風湯けむり渦となる河原

乗れるなら亀を乗せたし花筏

義経忌勸進帳を独吟す

筍を煮る妻の背に老いの影

春寒し草木はすでに芽ととのへ

帯のごとくに尾道水道霞みたる

風船をもらひ心の弾みけり

時の鐘ひびきに春の雷こもる

号外にあまた駆け行く春の街

寄り添ひて何故旅立たぬ春の鴨

英語辞書置きて場所取り花筵

支へ木に樹齡預けて紅枝垂

百礎を薄紅に飛花落花

蕊の黄の鮮やかなまま落椿

愛媛

伊藤 康子

埼玉

小田 知人

松本 清川

山形 麗子

片野 光子

東京

木野 裕美

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 塩出 眞一

* 選句は全て 品川 鈴子

古顔に石買はされて苗木市

中村 碧泉

草花や木々の苗を商う市が始まると、庭いじりの好きな人達は、当ても無くても覗いて見たくなる。いつも訪れる顔ぶれなので主客は古いお馴染みで、ちよつと話し込むうちに、盆栽用か庭向きか、予期さえしなかつた石を勧められ、ついその気になった。生ある苗と永遠なる石の調和、この春は後者を求めた。

たんぼぼや子等は防犯ブザー下げ

内山 芳子

通学の道端にはたんぼぼが溢れるような田園地域、みれば幼い児達はみな防犯ブザーをぶら下げている。私どもも教育勅語を誦じた頃は、のどかだった辺りなのに、近頃は恐ろしい受難が相次ぐ時世。

アマリリス陽気に十字架を背負う

藤澤希宗子

アマリリスは彼岸花科の多年草で、南アフリカの原産。丈が50センチほどの太い花茎の頂きには、六弁の大輪で散形の花序が付く。みれば十字架に磔はりつけのキリストの姿と似た形ではあるが、大抵が紅や緋色で、おおよそ憂いを寄せ付けない陽性の風情。南米のリオデジャネイロでは、山頂から復活のキリスト像が穏やかな悟りの眼差しで俯瞰する。これは更に明るく苦難を背負う気構え。

春泥の片足乾くフラミンゴ

高橋 照葉

フラミンゴが片足を上げ一本足で佇んでいる。上げて足のみずかきやその上部辺りに春のぬかるみが付き、そのまま乾きこびりついている。よく観察して作られており、「片足乾く」の中七で、長い間一本足で立っている姿が的確に描かれている。フラミンゴの胴の自と羽の紅との明るさに「春泥」の季語がよく合っていると思う。(以下略)